

文のしおり

関西大学所蔵

萩原広道の消息

関西大学図書館 手紙を読む会

一、はじめに

幕末の国学者萩原広道(文化二一―文久三年一八二五―一八六三)の消息二八通が、総合図書館に蔵されている。その大方は周防天満宮の神官鈴木高頼(文化九―万延元年一八二二―一八六六)に宛てたもので、凡そ嘉永元年から万延元年の間に認めたとと思われる。嘉永元年以後と云えば、広道が備前藩を脱し(弘化二年)て大阪に住むようになった。この事には係り、窮乏に堪え乍らも本領を發揮した時期にあたる。これら消息にもそれが見て取れるのである。

もともと広道は細やかな手紙を書いた人であるが、それがピークに達し、実に多彩な内容を繰り抜けるのである。歌論、学問論をはじめ著作、出版の事情から経済、政治向きの意見まで広汎に亘る。とり分けその動静を記し、或は論評を加えて取り上げた人物は多数に上り、興味尽きないものがある。

消息は、その形式に於ても変化の相を見せている。糊口を凌ぐ手段として、広道が版下書きを内職にしたことは周知であるが、彼が能筆であったことは紛れもない。殊に細字に巧みで多くは鋭く、時に素直で愛すべき字を書き、そして時に圭角を留めることもある。注目すべきは、左書きの二通が含まれていることである。晩年中風を病んで右手の自由が利かず、左手に認めたものである。彼の短冊には偶に見かけることがあるが、消息は

珍しい。嘗て井上通泰は、拙い字と評したけれども、じっくり眺めれば彷彿として其の折の模様を感じる事が出来る。

いま一つ注意すべきは花押である。消息中の五通にそれが見える。孰れも意識的に別の様式を試みたようである。相互に違いがある。そのうち最後の一通は左書きの花押であるが、これらの詳細については別の機会に譲り度い。

今回は、所蔵中の三通を選び翻刻(第一、第二、第三消息)することにした。改めて云うまでもないが、これまで公刊された消息として井上通泰編『萩原広道消息』、大阪府立図書館紀要中のもの、そして一日会編『萩原廣道書翰』等があり、総合図書館蔵の消息は、新しく付け加えることになる。

なお、関西大学図書館手紙を読む会のメンバーは、以下の通りである。

森川 彰、大国克子、池尻孝子、大塚千歳、長谷章子、
八尾奈緒美、田中純子、福井智佳子、鵜飼香織(担当 森川)

二、翻刻

翻刻については、次の要領に従った。

- ・ 漢字は、原則として常用漢字に改めた。
- ・ 仮名は、原則として片仮名及び平仮名を用い、変体仮名は平仮名に改めた。
- ・ 踊り字はそのままにした。
- ・ 本文には読点を施した。
- ・ 本文の字数、行数は原形に従った。
- ・ 朱筆を用いた箇所は、「(朱)」と付した。
- ・ は判読不明を示す。
- ・ 追而書は二字下げとした。

「第一消息(嘉永元年正月廿三日)」一六・七×七〇・九糧

(端裏書) 鈴木様 萩原

客冬十月十五日御発出之華翰、本月

廿日書林秋田屋太右衛門へ相達、辱拜見

仕候、先以新春之佳慶、不可有尽期御坐候、

益御康健御超歳被成、抔賀之至奉存候、

如来教、未拜顔不仕候処、虚名御高聞

之由二而遥々御芳訊被下、汗背之至奉存候、

併御高志之段千万辱拜謝仕候、扨今般

鰻玉集様之物御編集、広島書林へ御遣し

御上梓被成候二付、愚詠御差加へ可被下段、被為人

御念御示し被下夫々承知仕候、決而申分八

無御坐候へとも、呉々汗顔之至奉存候、尤頃日中

紀州長沢伴雄、鴨川集と申物編輯仕候とて、

愚哥差出候様二と申越候間、百首斗遣し申候、

其中へ入候哥睨と八不覚候へとも、二三首御坐候歟、

其分朱印仕置候間、可相成八御略可被下候、

是又此上二も愚詠可差出様被仰下、承知仕候、

併最早御紙面御発之刻今八、余程月日相過候事故、

如何哉と八奉存候へとも、旧作近作少々相記し

さし上申候、此中二も長沢へ遣候哥も、若有之候哉、

手扣なとも無御坐候へ八、慥二八不存候へとも、大方八

かしこへ遣候分八、除キ申つもり二御坐候、尤此内

御撰被下、唯四五首二ても御差加へ可被下候、別二

根岸條子と記し候哥、少々書付置申候、是は

備前之旧友根岸兵弥と申者之女弟二て

御坐候、哥二執心仕候而、小生社中二ては、女流之内

第一之様二相見え居申候処、一昨冬あへなく死去仕候、

右二付、今般之御撰二何卒一二首にても御加へ

被下候八、可為本懷奉希候、此義八偏二御頼

申上候、扨又此表二て、友人など可然者之哥

御望二候由、是又承知仕候、併いつれも火急二八

難調御坐候上、十月後よほと隙取候事故

自然御撰相濟候八、折角差上候ても御不用と

奉存候二付、一応相同申候、もし未相濟不申候八、

急便可被仰下候、西田直養、小林大茂、

村田嘉言、佐々木春夫など、其外も四五輩

取あつめさし上可申候、此段左様御承知

可被下候、拙著係辞弁と申もの御覽被下候由、

御甘心之旨被仰下、慙愧仕候、大畑年之助手

広嶋二て御出会、尔後貴宅へ罷出候由、承知仕候、

仰之通、長崎辺へ参候とて去年七月、広島へ

文通仕候而已二て、今以左右承不申候、いかゞ致候哉と

不審二存居申候処、さて八未御近辺へも不帰候哉、

尔後もし罷出候八、宜様御致声奉頼候、

同人二八色々用事も御坐候へとも、所在不分明候故

打捨置申候、此段も御伝被下、急々一左右致呉候

やつ、御申伝可被下候、奉頼候、書状秋田屋方へ

差出候様被仰下、承知仕候へとも、貴翰殊外

遅着仕候二て相考候へ八、又々遅引之程難斗

御坐候二付、堂嶋飛脚便二さし上申候、尔後若

火急之御用も御坐候八、何卒飛脚屋へ御出し

可被下候、商家之便八毎々遅引二及候事二而、

何之間二も合かね申候、此段御承知可被下候、

当春八、御上坂も可被成哉之由、左候八、不遠
拝顔可仕と奉存候、拙生寓居之地八、大坂之北
北野村と申処にて、梅塚天神と申寺之横町

にて御坐候、御状なと被下候八、堀川戎宮神主

松岸左京と申方御当にて、御出し可被下候、品二寄

小生八、当春転居仕候ほとも無覚束御坐候間、此段

御承知可被下候、別帛言封、貴辺より御便利

之処二御坐候八、御達し可被下奉頼候、尤便宜

あしく御坐候八、決而態々御達し被下候二八、及不申候、

重便御返し可被下候、貴国之地理不案内故、

甚押付かましく御坐候へとも、卒尔二御頼申上候、

此段御用捨可被下候、黒川村八、西国往来小郡の

一里余りあり、とか承申候、書外色々申上度事も

御坐候へとも、先責答迄如此御坐候、余寒随分

御保護專要奉祈候、恐惶謹言

正月廿三日

萩原鹿蔵

広道

鈴木武雄様

案下

尚々、急書乱筆御容免可被下候、以上

「第二消息（嘉永元年三月廿一日）」一六・二×二二二・二糧

（端裏書）鈴木様 萩原

尊大人御年賀之哥さし上候様認置候

へとも、今便間二合かね申候、後音まで

御免可被下候、（朱）

二月廿五日之芳墨、本月廿日相達し、忝拜見

仕候、春暖之節御坐候処、益御多祥被為在候段

奉賀候、拙、拙生如旧消光仕候、乍憚御放念可被下候、

初被仰下候事とも、夫々承知仕候、玉石集御撰

定之義二付、数条被命候事、早速相果し可申候、

紀州伴雄へ八即今日手帛出し、御存旨之旨申通候、

西田へも早速通し可申候、小林大茂事八頃日国勝手

被申付、不日二引取候とて、殊外多忙之由承候、是は

急二八むつかしく御坐候間、二篇御撰之節迄、御延し

可被下候、御企之よしヲ八申通し置へ候、村田嘉言、

佐々木春夫八茅屋より殊外遠方故、度々も出合

不申、即日二八得果し不申候間、近々相通候而返答

可承候、左様二御承知可被下候、野々口隆正へ被遣候

哥、是又早速通し可申候、但彼翁、天性怠惰之人

之上、殊外多忙と聞え、し八く尋遣候事も、毎々夫成二

なりかち二御坐候間、一定返答致候事、無覚束御坐候、

此段八野生の急二八無御坐候間、御含置可被下候、

直養哥、都大路之事、貴説之通なるへくと相考申候、

例証そら二八覚居不申候、さるへき書籍も無御坐候故、

急之御答二不能候、直養へ八申遣し置候、旅路も同断

なるへく、星つゝハきハめてひかこと、存申候、されとも、

も此位之事八存居可申候、夕つゝの書損二や、返々不審二

御坐候、猶又申達し試可申候、初近世之哥八いみしく

聞え候人々の二も、彼是可申節相見え候上、はやりかなる

初先輩は、ひか事二ひか事を重ねたるも、見え申候故、

野生も玉あられ二效ひ候而、さよしくれ又おとたて、

いきたなき学の窓をおとるかさ八や、と申哥を端二書、

さよしくれと申物を抄書いたし、此節上木為致居申候、

事々敷様二相聞え、傍痛くと思召候半なれとも、不得止事

しわさ二御坐候、発行之節、御披見御批評可被下候、尊方二も

右様之筋、何角御著述之物御坐候よし、先以祝着

仕、甚ゆかしく奉存候間、近藤氏分返し来候八、早々

拝見蒙愚を発明仕度候、呉々奉頼候、近藤氏

寄居哥談初二篇、一閱仕候、書林秋田屋より野生(汚れ)方二三毛

何ぞ出し候様申来居申候、追々何ぞ遣し、同氏二も

知音二なり度と存居候へとも、雑務多忙二而未た

遣し不申候、此段再四相考候二、甚非礼恐入候へとも、昨今甚乍序申上試候、今般玉石集御撰二付、

右哥詞とも御詰難之義至極御尤二奉存候、併惣体多忙之処、御大儀俄二発し候故、得削り不申、返々

世上有名家と申者を見わたし候二、忠告して歎ふ者八御賞覽可被下候、(朱)

稀なる様二相見え候へ八、御手元二而、ひか事の分御捨被成候而、

さしつけ先方へ御尋被成候事八、暫時御見合にて八如何と

相考申候、就中、都会之人氣八う八へ斗ほめ合て、

さりけなく過し候体之人多く、たま／＼病二いひ中テ

たる事も御坐候へ八、猜忌を招く媒とも相成可申、左候八、

向來事二触故障多キ事も、必可有之哉と奉存候、

但し直養、春夫など八、決而左様之人物二八無御坐候

へとも、し八／＼何方へも御詰問被成候八、妙ならぬ事も

御坐候半哉と奉存候、此段甚以申上かね候へとも、御心易

被仰下候事故、忠告仕候、呉々御用捨可被下候、かの譏事に

似たりとか申やうなる筋にて、思召はかり兼候へとも、申上試候、

拙生なども、国元二居申候内八討論を好候而、京垣へ出候砌も、

彼是研究之義二付、舌論など致候処、大二土風二不叶

とて、諸友処々諫候故漸々閉口仕、近來八唯はりぬき

人形の如くなる体にて居申候、定而いふかひなく被思召候

はんと、慚愧仕候へとも、心をしらぬ人二向ひて討論致候八、

度々災之端を引出候事故、唯一二之知己を待斗二御坐候、

情態御憐察可被下候、但し拙生杯八、ヤハリ元之田舎児二

御坐候間、向來思ひたけ御揉被下度候、下聞を恥諫争を防候

様なる事にては、大業八成就致間敷義二御坐候へは、格別二

御頼申上置候、切此一条八、極密之内啓二候間、御他言決而

御無用二御坐候、愚翰も御覽後御投火可被下候、唯々

此等之御用意御坐候八、幸甚たるへくと奉存候而已、死罪

長沢へ被遣候玉吟数首拝見、いづれも金玉歎服仕候、

重便も御坐候八、御短尺拾葉斗、御認被下間敷候哉、同好

之者二も相示し申度候、先頃任仰、拙作少々認上候処、

預過当之御賞誉、痛却仕候、定而ひかこと多く

可有之候間、無御遠慮、御添削可被下候、切又

尊大人御年賀二付、拙作指上候様被仰下、承知仕候、

如來教、年賀之哥二八、大二こまり申候処、春の比八

殊外多く乞候人御坐候而迷惑二付、知識之外へ八、一切

断候と申定二仕置候へとも、格別御懇意被仰下候故、

不顧拙悪、呈上仕候、宜御斧正可被下候、佐波之

藻芥と申御隨筆御坐候よし、是又ゆかしく奉存候、

追々拝見奉希候、何分二も遠路にて往来不都合、

遺憾之至二御坐候、爰元二も、少々入御覽度もの御坐候へ共、

草本一部宛之外、無御坐候故、得さし上不申候、御上坂之節、

御批判奉願度候、黒川村山下玄逸へ之手帛

御届被下候由、御役介之至二奉存候、同人事先年々

当地吉益掃部方へ逗留、医学執行仕居申候、掃部息子

主税同道二而茅屋へ参、哥をよミかけ申候処、急二宿元〆
 呼二来候よし申、帰り申候、よく八出来不申候へとも、志八厚く
 見受申候、帰郷之後八、近所二友人なと無御坐候八、
 さそ打捨申候哉と覚申候、貴郷〆もよほと隔り居申候
 様子承候へとも、もしや御出会之事も御坐候八、可然御教示
 可被下候、とにかくに、爰元より八遠路二て、不便利二御坐候、
 此段無急度、御頼申置候、大畑年之助事
 承知仕候、殊外長逗留、何を致居候哉、併つらやましき
 事二御坐候、小生も西遊之志御坐候へとも、貧婁二縛
 せられ、身しるきも得不仕、切々迷惑仕居申候、随而
 あまり御なれく敷候へとも、御頼申上度義一事御坐候、
 其義八近来、諸国名所図会と申物、俗本二而出来、
 殊外はやり候二付、西海道名所図会もあら八、と申
 書肆も御坐候よし、品二寄請負之撰述可仕歟、とも
 存居申候へとも、はるく一見二下候とも、委曲之義八相知申
 間敷、且雜賣とかかり候而八迷惑之義故、見合居申候、
 併備後迄まで八、所々二知己之者も御坐候へ八、随分居
 なから二も出来可仕、安芸二八所縁無御坐候へとも、蔵島
 名所図会様のもの引合セ候八、随分かなり二八知れ可申歟、
 御国より赤間迄八、一向手寄無御坐候、依之尊兄二八
 定而御考も可有之、且御国之名所古跡記し候書も、
 沢山二可有御坐候へ八、其書とも御探索被遣、且誰二ても
 好事之画人二御誂へ、画図を御かゝせ被下候様之事八、相成
 申間敷候哉、尤通俗之もの故、研究八大抵二て宜候、
 海陸二道二触候所々斗二而、宜御坐候、此拳八畢竟
 利の為二撰候位之もの故、俗二名高き方、又八奇事
 怪談などの方を集候方を、むねと仕候つもり也、利の為二
 書ヲ編候と申事、呉々汗顔之至二御坐候へとも、困乏二て

愚存之書開板仕候事たに不相成、憤慨仕罷在候事故、
 先通俗之物二て、其等之階梯二仕候心得二御坐候、此段
 呉々御憐察被下、可相成八御考被下度候、但し急度
 書林へ申談候事二而八無御坐、仕方さへ相分候八、先赤間
 迄を上編として綴り申、其後八それを名として、
 西遊も仕度考二御坐候、返々浮薄之御相談二御坐候へとも、
 御頼申上度候、当春、御上来も可有御坐候処、御著書
 等二て冬二成候よし、其節八必御訪来可被下候、小生も
 寓居之地相転し、当月初り高麗橋二丁目、
 堺筋西へ入北側へ移住仕候、尔後御状等被下候八、
 右処御当可被下候、書余色々申上度候へとも、短筆
 難尽省略仕候、猶又重便可申上候、先八貴答迄
 如此御坐候、草々不宣

三月廿一日認

萩原広道

(花押)

鈴木賢詞契

玉案下

尚々、時氣折角御自愛專要奉祈候、浪花人
 御知音之よし、森熊夫、高山維文、是八一向承不申候、
 其外八随分存知罷在候、近来八京攝もさしたる人物
 無御坐様子、まして浪花八御存之俗地、頓と埒明不申候、
 去秋〆桜鞆負東雄と申常陸浪人、参り居申候、
 本学唱へ居申候、一両度出会仕候へとも、学業之事八
 委敷承不申、人物八堅固之質朴家二而、甚以
 殊勝二見へ申候、追々相咄可申と存居申候、貴国
 御近辺人物、如何御坐候哉、嚙々篤厚之人も可有之と
 奉察候、御序二少々承度奉存候、草々以上

追書

紀州加納諸平方へ御文通、其左右御伝被成候よし、
 同人事八旧冬、不快二居申候而、うつし心もなきよし承候、畢竟八
 乱心と聞え候間、鯁玉六編などの挙八とても無覚束段、同藩
 之人より承候、左候へ八、其事御待被成候事御無益歟と奉存候、
 長沢鴨川集八初篇二冊出来、最早発行二近く相成候と承候、
 夫故玉詠八、二篇之料と思召可被下候、其内返答承可申上候、

「第三消息(嘉永元年十月廿六日)」一六・一×二二五・九糶

(端裏書) 鈴木様 萩原

本月朔日広島より之華翰、十六日書林

秋太、送來拜見仕候、寒冷日々相加候處、先以弥

御安適被為在、珍重之至奉存候、随而小生、無異義

消光仕候間、乍憚御放念可被下候、御書中二承候へは、

当時広島辺迄も、御教示二御遊行之由、御羨敷

奉存候、野生杯八不相替念忙中二、碌々として籠居仕、切々

迷惑之至、御憐察可被下候、さて被仰下候義、夫々委曲

承知仕候、其後今吉封、三田尻船へ出し置申候、定而

相達し可申と奉存候、玉石集之義、委細承知仕候、

書名之事も失敬申上、恐入奉存候、是又御発行之上

氷解仕候八、申所無御坐候、哥色々諸方へ申遣候へとも、

例のいつれも長々敷事二而、少しもさしこし不申候、何分

御発行之上八、早速相集り可申と奉存候、秋元安民

哥先比より、さしこし居申候、今便さし上申候、紀州

長沢伴雄へ之御伝言申遣し候、且かのかも川集は、
 初篇八既二刻し居申候、近日発行可仕候、かの集中

少々論ある哥も有之候故、(此一条八御内分也) 内々心付遣したる事も御坐候、

定而直し可申歟、夫等之事二付、未発行延引いたし

居候事と奉存候、出来次第早そく、吉部さし上可申候、

拙著之書名、果而難し候人御坐候由、為二御弁解も被下候

との事、辱奉多謝候、これも先書中申上候通二而、大方

貴慮と暗合仕候も、奇二御坐候、御一笑可被下候、何分追々

願下り候八、談合仕候而相改申度候、諸平か事

御尋被下、御書中二而初而承候事故、彼是聞合候處、

成程古蔭と申者、参り込居候よし、養子二成候ほと八

如何哉と申候故、長沢二尋遣し申候、返事承候上、可申上候、

鯁玉六編と申もの八、右古蔭校合して出し候とか申

事二候、さて又諸平短尺の事被仰下、承知仕候、

乍去、兼ても格別入覓二も不仕候事故、私方二八無御坐候、

快気さへ仕候八、何ほとももらひ、さし上可申候へとも、

只今の体二て八、致方無御坐候、其内猶又聞合可申候、

御辺之短尺、沢山二御患投被下、忝拜納仕相案申候、

猶又宜奉頼候、私方よりも、追々さし上可申候、但し

瓦礫甚多く、金玉の稀なる二八困り入申候、河本

公輔と申人の書たる、おかしの仮字考御坐候よし

未見之書二御坐候、其人も未承候、後音御示し可被下候、

岩見嶋、果していはひ島二候由、彼地之奇境なる事

御示し被下、忝おもしろく奉感候、蓬杖天狗石、

はましなしの実、何卒追々頂戴奉祈候、近藤

晋一郎殿事被仰下、承知仕候、かの哥談之義も、

素、承知仕居候へとも、兎角多忙二而、寸隙無御坐候、

等閑二打過居申候、追々さし上可申候、御国産半幣之事被仰下、忝奉存候、いかさま二も仰之通、却而此地之安き事も、可有之候、大氏巻帖二十枚

是八よき分也

二而、三分二三厘位仕候、多く買候八、少し八まげ可申歟、何分二も六十日之払二八、大閉口仕候、便宜之義も御坐候八、御一考被下度候、同じく八大半幣之方宜しく

御坐候、是も大氏三分二三厘、四五厘位之事二御坐候、

安芸の御用紙とか申半幣、近来八世間二一向少く

御坐候、虫の早く喰候幣ながら、うつしもの二八妙二御坐候、

もし御手續八有之間敷候哉、是八少し斗もとめ

申度候、御考可被下候、産物等之義二付、御考も

御坐候よし、大慶仕候、追々御示教奉希候、とかく

加様之事ヲ申候へ八、世間不通之学者八山師の様二

申、迷惑仕候へとも、治国之基本たる活業の道に

疎く候て八、空学と可相成と存候迄二、人しれぬ

愚案をも出し、いらぬ世話をやき申事、呉々御憐察

可被下候、若御同意被下候八、実二可為本懐と奉存候、

集会之隨筆、未たそれなり二相成居申候、何分

野生周旋不仕候て八、世話のやきて無御坐、当惑仕候、

いつれ二も、近々相企可申候間、呉々御出説奉希候、

嚶々筆語中、蘭学めきたる事、御不承知之由、

此義八野生も御同意二御坐候、中二八色々嘴を容度

条も御坐候二付、今般一二説考置候事も、御坐候へとも、

あまり二觀面二、拆き候やう二も聞え可申哉、と先取置居申候、

是八御内分二被成可被下候、拙著之書、追々さし上

可申様被仰下、承知仕候、御煩勞之至、返々奉多謝候、

広嶋末田氏、岡田氏之事承知仕候、追々

書通も可仕候、是へも、かの西海名所之事御頼

被下度奉頼候、かの地二八、さしたる知己無御坐候而、

困入申候、御考可被下候、名所図会一件、色々

御周旋被下、実以辱奉存候、何分二も宜様奉頼候、

頃日中より所々へ懸合、大方基本之処八相立申候、

当暮より来春へかけ、備前、備中、淡路、小豆島

辺迄つゝり候上、夏方より夫を携候而、九州まで

罷下り候都合二、相考居申候、左候八、参上仕候而御役介二

相成可申、宜御引廻し奉頼上候、仮令二存立たる

事ながら、諸国のかげ引、諸書の異同など、案外二

手間の入候事二、可相成勢二而、困り果申候へとも、是二八、

話斗之手段も御坐候事二而、有益之書籍類をも

調度つもり二御坐候間、今更止二も相成かたく御坐候、

呉々御助力奉頼上候、且是二付、真珠より内々御深切

之事共、承たる次第も御坐候而、大慶仕居申候、但し、

申迄二八無御坐候へとも、無名之所など八、御捨置可被下候、

余り二募り候て八、却而不評之端も出来可仕哉、と

奉存候、此段乍失敬、御含置可被下申上候、千座事、

御高察之通二御坐候、元来、言霊とか申事したる人二而、

仮字ちかひも、てにをはも構ひ不申候、不思議二存候へ共、

先達之人故、一言も不申出候、唯酒友二而、折々付合申

斗二御坐候、さし上候短尺二、上中下印之様被仰下、汗顔仕候、

いつれも下印二御坐候、惣体当地など二而八、浮薄之風二而、

物の師二威権なく、弟子の方へ追従して世を渡る

体故、哥なども実意二直し候方八、多く八行八れぬ

風義、言語同断二御坐候、夫故、大氏二やりはなし

置可申様、節々人より異見仕候故、近来は

大方面倒二なり、左様之体二而置申候悪風俗、

実二恥入申候斗二御坐候、夫故社中二八、文章一段も
かけ候様之者八、一人も無御坐候、是二付ても、憤慨之

事斗二御坐候へとも、只今の勢二て八、何共無致方御坐候、
今少し話斗之道出来仕候八、片田舎へ引籠り、

さわかしき事を聞候八ぬ方二仕度と、日々工夫仕
居申候、御憐察可被下候、西田直養へ古文書類

御渡之よし、承知仕候、明後日八、尻無川と申所へ
紅葉見二参候よし、さそひ申候間、出会可仕申緘^カ

置候而、あと^定御返事可申上候、池田二居申候山川^定

大三郎正宣と申者八、専ら左様之事斗仕候人二^{年六十二近し}

御坐候、近來格別二懇意二申参り申候、此男へ相談仕、
追々貴家様^カも奇物奇書、御こし被下候間、先

何二てもさし上可申様談し候処、即別帛之類
差出し候間、御覽御留置可被下候、法隆寺仏背文

に八、少々拙案認さし添置申候、御笑覽可被下候、
別二目^録やうの物も、さしこし候間、御望二候八、追々

拙家へ取寄、うつしさし上可申候、右正宣事八、
哥文八短なる方二て、仮字もてに八も違ひたる事

ありけに見え候へとも、穿鑿八里数をもいと八す走り
廻り候故、野拙なとより八勝り居申候、近來京二て

没し候穂井田縹輔忠友と申者と、至而入窺二仕候、
先八かの忠友か小店之様二見え申候、家業八酒家二而

已前八大名之銀主など致したる豪家二候へとも、近來八
逼塞いたし居り申候、乍去、諸蔵屋敷などへ出勤候二、

一月二二三度も大坂へ出申候、豪邁なる老人にて、
人の言八、大抵きかぬかたちの質二候へとも、申すこと二八、

折々妙なる事御坐候故、別而交り申候、追々八、御書通も
可仕候、右之御つもり二而、御返事等可被成下候、見識は、

大方漢学見か見え申候、夫故神典の論など八、
一度も致し不申候、是等之人、先近辺二ての古物家二

御坐候、さて御殿父様二八、当時故実方と申御役
被命被成御坐候由、き八めて妙なる事多かるへくと、

奉存候、追々珍物拜見等、御願ひ置可被下候、小生義八、
何事も埒明不申候内、故実字と古器物類ノ中二も、

不案内之事斗二而御坐候故、追々御尋申上度
事も沢山二御坐候、此段も御含置被下度候、右正宣

著述、薬師寺仏足石哥の解と申もの御坐候、追々
さし送らせ可申候、右正宣^カ来候手帛御事二

係りたる処、切ぬきさし上げ置申候、文勢豪邁御覽
可被下候、玉石集二も、追々哥さし出し可申候、

別帛被仰下候御著述もの、事、承知仕候、即
書林一兩人へ相咄候処、かやうの物八、其類々の

書刻し居申書林へ被遣候へ八、早速刻し可申と
申居申候、何分二も草稿拜見不仕候て八、一定之処、

且価なとも難定候間、御越し被下候上、御相談可申上と
申居申候、是八いつれも疑ひ深きもの二て、草稿を借て

人二も見てもらひ、なといたし候上ならて八、慥なる返事も
仕らぬ癖二御坐候、何分共出来二候へ八、拙生方迄御登し

可被下候、其上二て懸合、御為二相成候様取斗ひ可申候、
俗語より雅言を引出候様のもの、御作御坐候由、

是八一定、書林の悦ひ候ものと奉存候、詞の林の事も
承候へとも、是八仰之通、詞も少く候上、猶いか、しき事共

も見え候へは、御出来二候八、御越可被成候、いつれも二而刻
させ可申候、大被訳解も、おもしろかるへくと奉存候、

是も拜見之上、書林へ談し可申候、ふるの山ふみと申もの八、かの嶋原女郎屋の作のもの二御坐候哉、いかさま二も、近来八此書大二行八れ、此辺二ても、持ぬもの八なき位の事二御坐候、乍去、愚存二八、かの書八猶書あるへきものと相考申候、其故八、類語二万葉の古言をましましへ申候故、初学輩など例の、なく声ぬえに似たり、とか申やうなる哥をよみ出し申候、是八本居先生説の如く、古言と中昔言と八、清くわかち申たき事二御坐候、又万葉と八代集とを作例に挙候も、今少しよからすと存候、其故八、万葉八申にも不及、八代集の哥も大かた八、題を出してよみたる八少く、題あるも只一字題の類二候故、結び題の類の委しき物をもて、後より逆におし当候へ八、傍あたりて、傍あたらぬもの二成申候、初学輩八何の心もなく、夫を本としてよみ出候故、えもいはれぬ事共を、よみ出申候、惣而近来八、宗匠家の哥にも傍題の多キ八、全く是等の書によりて習ひ候誤と相考申候、是又本居先生説のこたく、題林愚抄の類、或八文治建久より後、結題をむねとよみたる哥ならて八、此難のなき八あるましくと相考候へ八、古言と後世言とを八別々二いたし、題の相当、不相当をよく考へて挙たきものと、相考申候、さて古の山ふみ二いつる題なき故二、別二御作も御坐候よし、是又上木の事八、たやすく呑込候書林可有之と奉存候へ八、御草稿御越し被下候へ八、早速かけ合可申候、但し、同じく八かの山ふみを八捨て、別に御撰被成候て八如何、さら八金玉の書出来仕候而、野生など初学を教授仕候二、大ニくつろぎ可申と奉存候、貴慮如何御坐候半哉、御示し可被下候、小生も頃日中困窮仕候二付、俄二初学ものをつくり、書林へ売渡し申候、

一本八心のたね二冊と名付候、是八類題仮字つかひ名所集或八玉あられ畧注、哥会式、懐帛短尺の認様、又組鏡の縮図解、八ちまた四種話の図、同目錄字注などやうの事を集め、はしめより板下二かき申候、又葉山のしをりと申もの一冊、是八詞書の書やうを、音信慶吊の事二直二用ひられ候様二、論定したる物二御坐候、いつれも俗書、沙汰之限二御坐候へとも、かやうの物ならて八、書林悦ひ不申候故、廿日斗之間二卒業仕候、追々御高覧御一笑可被下候、八ちまた二論ある条八、右之中へ書入申候故、別二八不申上候、猶、右の心の種の後篇をこしらへ申度、希居申候、首に八結題の作例と、自他のわからぬ題を釈し、さて詞寄とよみかたを、出し候つもり二御坐候、併右御著述同様の物二なり候て八、いたつらわさ二御坐候間、何卒御草稿拜見奉希上候、別二古言訳解と申ものをも、もくろ三居申候、是八雅語訳解の例に、古言を仕候つもり二御坐候、是も俗書二御坐候、先日承候さよくれのこときもの、御撰定も相済候八、御上梓奉頼上候、是八、私も追々相集メ申度事と、存居申候間、何分二も御上梓相済候あと二而、又々ため置可申候、さて御上木之事二付て八、必書林二利を射られぬ様、御用心肝要二奉存候、大被俗訳の類の御撰八、大方板下二御した、め被成候而、草稿を書林二御売渡し被成候方、つまる処八御得用と相考申候、此方二而蔵板二仕候ても、さま／＼のわつらひ御坐候上、竟二八賈豎の姦計二中り、書も弘まらず、刻料も戻らずと申様二成行かち二御坐候間、此段よく／＼御考置御尤二奉存候、是八、野生近来上梓の事二、ひたとか、り居申候、他の頼まれ物などさま／＼二試み候内、書林の姦計大氏八推察いたし候へとも、未全く

会得せぬ事も御坐候而、甚可悪可畏事多く見聞

いたし候故、御心得のため申上置候、惣而商売之わさ八、

学者にて八甚わかり難き物なる中ニ、書林之業なと八、

殊ニ素人ニ知れかたき事多きもの候故、さまくなる

姦計を巧ミ出し申候、されとも、官ニも其事ニ委しき人

なき故、是又大氏ニ済来候など、可歎事ニ御坐候、此御咄八

拝顔之節、微細ニ可申上候、中々書中ニ難認御坐候、

大畑真珠八、如何いたし候哉、此節八帰国も仕候哉、

先達而奉頼上候書中ニ、彼人身上の事をあまりニ

議論いたし、跡にて考候へ八、腹を立ね八よいと後悔仕候、

もし御出会も御坐候八、呉々御謝し置可被下候、毎々か様

之事ニ出過候而、後悔仕候事不絶、甚以汗顔之至ニ御坐候、

上ニ申おとし候長沢伴雄へも、哥出候様ニと申遣し置候、

かの辺の哥をも集メ可差出、左候八、貴国之御近辺にても、

御集メ可被下と申置候間、追々かも川集へ入候哥をも、御近辺

御募り置可被下候様、奉頼候、

書外衝口難尽御坐候へとも、灯下之急書不能委曲、

省略仕候、尚追々啓上可仕候、恐惶不宣

十月廿六日

広道拝

鈴木賢契

玉案下

尚々、時氣折角御自愛奉祈候、状の末ニよみ哥を

かき候事、あまり流行めき候へとも、腰折久しふりニ而

よみ出候故、奉備高覧候、宜御斧正奉希上候、

野時雨

吾妹子に笠をかりちの小野なれ八 ぬるゝも

よしや袖のしくれに 是八袖の時雨にぬるゝもよしやといふ意ニ御坐候

袖のしくれ熟語ゆゑ、さ八聞えましくや、いつれ歎哥ニ御坐候(朱)

閑路氷

此題おもひの外ニ難題也、閑八氷るへき所

せき山のあらしを寒みはしり井の 名さへ

ゆるさすこほりぬにけり

疑真偽恋

占たにもいつはりおほき世中八 人のまことを

なにゝたゝさん

夢見恋

たましひに身をしまかするものなら八 夢の人め八

いと八さらまし

この哥八聞えぬニヤ侍らん、

おのれさへわからぬやう也、

全

夢にたにあひぬるまでは見えぬかな あ八ぬをつねの

ひもとく(朱)

こゝろならひは

此末のはもしを、にとせよと申人も御坐候へとも、

ににて八、をかしからすとて、争ひて止申候、

されとわろく候哉、拙案八、にと申て八俗調

なるへく存候八如何候八ん、(朱)

落葉隨風

風さそふ山下もみちちることの もろき八ふゆの

ふかきなりけり

冬にて八あまり二侍らんか、

且題とあまり離れてや候わん、(一行朱)

さのみ八とて止め申候、乍御面倒、御斧正奉頼候、